クラブ員４名がOP級関西選手権2014に参加しました。

6月7日(土)、8日(日)の2日間は、京都府宮津市で行われたOP級関西選手権に当クラブから、和歩、真大、勇斗、拓斗の 4 名が参加しました。低気圧が過ぎ去った後の不安定な天候ではありましたが、雨は降らずにまずまずの風に恵まれて、初日4レース、2日目3レースの計 7 レースが予定通り実施されました。今回、関西選手権ということでジャパン代表の 4 名が参加していましたので、クラブ員 4 名との実力の差だけでなくセーリング技術の精度レベルを確認できる良い機会でした。

クラブ員４名と保護者２名、指導者１名の７名は２台の車と軽トレーラーに OP４隻を積んで、早朝４時に高松を出発しました。順調に高速道を使って、８時前に宮津に到着しました。

10:30から開会式を行い、微風の中、レース海面に向かいました。4艇合同でクローズでのスピードとタック、上り角度のチェックをし、フリーでのスピードとジャイブのチェックを行いました。12時前になりまずまずの風が入ってきたので第1レースが始まりました。ゼネラルリコールを2回繰り返した後、I旗スタートで26隻のAクラス艇が舞鶴湾に乗り出していきました。

第 1 レースは 4 艇共にスタートが悪く、第 1 マークでは厳しい回航順位でしたが、クローズとフリーでのスピードがあったので徐々に挽回したものの勇斗の 8 位が最上位で和歩の 11 位、拓斗の 13 位と続きましたが、第 1 上マークではシングルで回った真大の艇がフリーでのスピードが上がらず 19 位と下がったのが心配でした。このレースで明らかに右海面を中心としたコースが有利で、上るブローを掴んだレグをとればなんとか上位に食い込めると感じました。第 2 レースからは右海面をとるためにイーブンのスタートラインの本部船側の上から勇斗と和歩はスタート位置をとるようになりました。

第 2 レースではトップスタートをした勇斗が第 1 マークをトップ回航し、ジャパン代表の 2 人を置いて次の 4 番手に和歩、5 番手に拓斗が回航していきました。このレースでは、勇人が 2 位、拓斗が 4 位、和歩が 8 位、真大が 13 位となり、レースで健闘できる自信を持つことができました。関西のトップレベルの選手の中で落ち着いてセーリングができれば十分戦えることを確信しました。

初日は、第 4 レースで拓斗と和歩が落ちてしまいましたが、真大は第 3 レースで 5 位を取り順位を戻してきました。勇斗はまずまずのスタートと上マークまでのコース取り、クルーズでのスピードが素晴らしく、第3レースと第4レースも3位、2位と堂々としたセーリングでした。

さて、宿泊先は京都府青少年海洋センターで大きな和室に 7 名が一緒に泊まりました。お風呂に入り、夕食をとったら寝不足もあり、午後 9 時ごろにはすっかり熟睡の世界に入ってしまいました。勇斗はきっと今日の良い夢を見ていたと思います。

2日目は曇り空の無風でしたが、地元の予想を裏切って9時ごろには昨日並の風が北東か

ら入ってきました。4 名とも良いとは言えないスタートではありましたが、クローズもフリーでもボートスピードがあるため上位に徐々に上がってきました。しかし、和歩と拓斗は最後にコース取りで失敗をしてしまい順位を落としてしまいました。最終レースは風も吹き上がり 5～6m/s になりましたが､勇斗は体重がなくてもしっかりとしたハイクアウトで、下からの最終レグでは 1 位の玉山君と 2 位の前田君を交わして一時トップになりました。しかし、歴戦のジャパン代表を相手にしてはタッキングマッチで遅れて抑えられてしまい、結局 3 位でフィニッシュしました。

勇斗は、第 1 レース以外では 4 位以下に落ちることなくコンスタントなレースをすることができました。表彰式では、1 位の玉山君、2 位の前田君に続いて第 3 位となり、4 位のマールトン君以下に 13 点差以上を付けてのトップ 3 に入ることができました。10 位には後半追い上げた真大、14 位にロングコースを引いて失敗した和歩、17 位に最後に崩れてしまった拓斗が入りました。当クラブの 4 名は、他のクラブの選手に比べ、まだまだ基本操作と基本技術で劣っているところが多く散見されましたが、今回の結果をもたらしたと思えるおらかで大局的なセーリングを今後も指導していきたいと思いました。

表彰式ではトップ選手 2 名と共に勇斗が賞状と賞品をいただき、正式決定ではありませんが今年の全日本の参加枠をゲットすることができました。7 名は、夕方に天橋立を見学して、夜の 9 時半に無事高松に帰着しました。

最後に 2 日間見事なレース運営をしていただきました京都府ヨット連盟と宮津ヨット協会の皆様に御礼を申し上げたいと思います。素晴らしいレースをありがとうございました。

レポート　小野澤 秀典